

保田與重郎とマルクス主義 —— 習作「好去好来の歌」論をめぐって

渡 辺 和 靖

Kazuyasu WATANABE

(哲学教室)

第一章「思想」の原稿募集

保田與重郎の「好去好来の歌」に於ける言霊についての考察——上代国家成立についてのアウトライン——以下「好去好来の歌」論——は、昭和五年八月、大阪高校三年在学中の保田が、湯原冬美の筆名で雑誌『思想』に発表したものである。

大阪高校の同級生西川英夫氏は「ブリリアント・クラスの明星——保田與重郎の思い出」で、この時のことをつぎのように回想している。

九月はじめ学校に出たらクラスは騒然としていた。同じクラスの保田與重郎、身体は大柄だが、あまり目立たぬ存在であった保田の論文が、哲学雑誌「思想」に掲載されていたのである。「言霊」という題名と、万葉集に関する文章であったことだけは今も覚えている。「思想」に十七、八歳の少年の論文が掲載されたのだから、誰もが驚いたのである。(『保田與重郎全集』——以下『全集』——第5巻「月報」3頁、講談社)

大阪高校入学当初から積極的に校友会誌や短歌会誌に文章を発表してきた保田であったが、その文学的野望はこの時すでに中央の論壇を志向しており、その動向に敏感に反応したのである⁽¹⁾。

昭和三年八月に廃刊した『思想』の後を受けて、昭和四年四月に岩波書店より刊行された第二次『思想』は、同年十一月号に「原稿応募」の広告を掲げ一般から論文を公募した。これは、再刊号の「編輯後記」で林達夫が「人々は次第にこの雑誌を目して、一般有識者階級とは縁のない極めて高級な、極めて専門的な学術雑誌となし」という反省に立ち、

『思想』は今後この現代人の最関心事に資せんがためにあらゆる努力を惜まないつもりである。(中略) 今後新進有為の士には大いに登場して貰ふつもりである。今日の如き転回期にあつてその動揺と変化とを最も強く感受し、最も問題を妊んで生き生き動いてゐるのは、「若き世代」であるからである。(152頁)

と主張したことを実践したものであった。

『思想』翌五年一月号の「編輯後記」に「原稿は相当集まつたのであるが、遺憾ながら今月分には無条件で取れるものはなかつた」とあり、三月号にはじめて佐木介夫「歴史学の方向」柳沼まきみ「マルクスの芸術的天分」の二篇が掲載された。同号の「編輯後記」は、「一つの立場をはつきり述べたものを、できるだけ多方面に亘つて採つてゆきたい」とその方針についてふれている。以後、四月号に志賀勝「ストリンドベリからオニールへの一線」、五月号に斎藤善太郎「マルクスの宗教批判」宍戸儀一「新しい芸術の形式に就て」、六月号に桜井武雄「多収穫競争について」、七月号に栗原百寿「相対主義と浮浪的弁証法——三木哲学批判」渡部左次馬「文学形式の変革はいかにして可能であるか(横光利一作品「鳥」の貧困)」がつぎつぎに採録され、九番目の論文として保田の「好去好来の歌」論が『思想』八月号の誌面を飾った。

磯田光一は、保田初期の思想形成を扱った先駆的な論考「ナショナリズムの美学 コールリッジと保田與重郎」(『比較転向論序説 ロマン主義の精神形態』昭和43年、勁草書房)で、保田の「好去好来の歌」論を取りあげ詳細に検討を加えている。磯田は、

現体制としての帝国が「ことだま」の完全な顕現であるならば、憶良における『貧窮問答』と「ことだま」讚美とは矛盾を免れない。絶対的な理念の顕現であるべき帝国が、すでに「理念」と「現実」との分裂に見舞われていたという事実を除いて、憶良の位置、少なくとも保田與重郎の見据えていた憶良の位置は考えられないのではなからうか。(190頁)

と指摘し、「保田の心には、失われた「過去」こそが「未来」の理念たりうるものであり「現在」には幻滅の想いしかないという実感がありはしなかつたであろうか」と論じ、マルクス主義への共感を歌い込んだ同時期の保田の短歌などを踏まえつつ、

このことは、昭和初年の左翼運動の原質的な構造を暗示するとともに、その心情の質をだれよりもよく自覚した保田自身の精神の位相を物語っている。時代の閉塞感を打開すべく、社会的反抗のう

ちに青春の解放を求めた人々は、その反抗の過程のうちに伝統的な心情に頼っている。(198～9頁)と分析している。磯田は、保田の浪漫主義のうちに当時の左翼運動との同質性を指摘した橋川文三の『日本浪漫派批判序説』(昭和35年、未来社)を意識しつつ⁽²⁾、「貧窮問答歌」と「好去好来の歌」の落差をそこに重ね合わせ、それぞれに理念の顕現としての国家の理想と現実を配当する。

磯田の論を受けて、大久保典夫氏は「昭和のロマン主義」(『国文学 解釈と鑑賞』昭和46年11月)で、「好去好来の歌」論について、

ここには保田の国家観と史観の原型があるだけでなく、ロマン主義の本質にふれるするどい洞察がふくまれていて、同時にそのことでわれわれを、プロレタリア文学と日本浪漫派との精神構造としての等価性への認識へとみちびく。(中略)このエッセイで重要なのは、憶良が喪われつつある「ことだま」(絶対・永遠)を讃美しながらも、一方で現世呪詛の浪漫的反抗を試みている点に共感していることなので、ここにロマン主義者保田と重郎の発想の原型をみるのはわたしだけではないだろう。(14～5頁)

と論じている。

また、桶谷秀昭氏は『昭和精神史』(平成4年、文芸春秋社)で、国学、ドイツ・ロマン派、マルクス主義という「保田重郎の浪漫主義における三つの指標」⁽³⁾が「好去好来の歌」論において「混沌未分といつたありさまでうかがひうる」(文春文庫版、211頁)と述べ、そこに展開された論理のうちに、マルクス主義の「唯物史観」とともに、富士谷御杖の「倒語」の発想があると指摘する。

生産力と生産関係の矛盾においてとらへ、それに支配されて発生し消滅する世界観を描く唯物史観と、「重濁なる性」をつかさどる神の道に支配されながら、理を求める人道との矛盾的自己同一の形而上学とのアナロジイが、保田重郎に気づかれてるなかつたわけではないであろう。(220頁)

桶谷氏はさらに、富士谷御杖の言霊論のうちに、のちの「戴冠詩人の御一人者」(昭和11年7、8月)における「同殿共床」という発想につながるもののあることを示唆している。

「好去好来の歌」論のうちに「戴冠詩人の御一人者」が準備されていたとする桶谷氏の指摘は興味深いが、保田の後の立場を投影しすぎている点で、形成過程にある保田の思想を捉えそこなっているように見える。

おそらく橋川文三の「幼少時代から家蔵のライブラリに生まれたであろう古典への愛着」(『日本ロマン派の諸問題——その精神史と精神構造をめぐって』『思想』昭和33年4月、31頁)という叙述に導かれたと思われる、

富士谷御杖といふ江戸化政期の国学者をいつ知つ

たのかつまびらかにしないが、おそらく祖父の蔵書で、鹿持雅澄の場合とおなじやうに、その『古事記燈』や『万葉集燈』をはやくからよんでゐたのであらう。(213頁)

という発言に示されているように、桶谷氏のうちには、保田が幼少期から古典に親しみそれを読みこなしたという根拠のない前提がある。

しかし、保田自身が語っているように、保田は鹿持雅澄の『万葉集古義』を「円本」⁽⁴⁾で読んだのであり(『日本浪漫派の時代』77頁、昭和44年、新潮社)、その御杖理解が土田杏村を経由したものであることは奥山文幸氏が指摘している⁽⁵⁾。(『橋と言霊 保田重郎「日本の橋」をめぐって』『日本文学』平成4年6月)まさしく保田は、「円本」に象徴される大正末から昭和初年にかけての大衆社会状況のなかで、土田杏村をはじめ多くの先行思想家の影響を受けながら思想形成をとげたのであり、その点で他の一般青年と何ら変わるところはない。

出自を特権化することは、昭和思想史における保田の位置づけを曖昧にしてきた。習作期の思想を検討するにあたって必要なことは、なによりもまず保田の受けた影響の数々を一つ一つ解きほぐし、それを時代状況の中に位置づけていくことであろう⁽⁶⁾。日本浪漫派とマルクス主義文学運動の等価性という橋川文三の提起も、こうした作業をとおして自ずから検証されていくというべきであろう。

第二章 万葉と言霊——アララギ・城戸・土田

『万葉集の精神 その成立と大伴家持』(昭和17年6月)の「序」で保田は、「著者は万葉集の詩人たちの故郷を、わが少年の日の郷土として成長した者であつた。世界文明に於ける最も古い根源の風景の中に育かれた」(『全集』第15巻、9頁)と誇らかに語っている。このような発言が、保田の出自を何か特別のものとする見解を論拠づけることにもなったのである。しかし、たとえば書評文「地上を行くもの」(『鶴』昭和9年4月)で「高等学校の学生であつた時分に、私は万葉集を愛してゐた」(『全集』第5巻、299頁)と語っていること、また「好去好来の歌」論で岩波文庫を底本にしていることなどを考え合わせると、保田が『万葉集』を自覚的に捉えるようになるのは高校入学以後であつたと判断される。

保田が『万葉集』に関心を懐くには、大和に生を受けたというばかりでなく、何か直接的な契機があつたはずである。その一つとして、「古代芸術の享受と私らへの啓蒙を語られた」(『佐々木恒清先生のこと』『炫火』昭和7年2月、『全集』第40巻、150頁)という大阪高校の恩師の教導と並んで、アララギ派の万葉研究に触れたことを挙げるべきであろう。

大阪高校入学後の保田の重要な文学活動の一つは短歌の制作であつた。『アララギ』昭和四年五月号に二首

が採択され、以後、六月号に一首、八月号に三首、九月号に一首と、合計七首が掲載されている。おそらく、それ以前から保田は『アララギ』を購読していたと思われる。

この時期『アララギ』は、万葉研究に情熱的に取り組んでいた。毎号、同人による万葉読解の座談会が組まれ、井上通泰、武田祐吉など専門家による万葉研究のほか、随時同人の万葉論が掲載されている。

その中には、たとえば島木赤彦の「山房独語(十三)」(『アララギ』大正13年5月)のように、

佐々木信綱氏は、その著「歌学論叢」で、貧窮問答歌、好去好来歌等に現れた深い情緒と雄大な技倆は、とても他人の作中に見出し得ないと激賞し、万葉集中、人麿と併称すべきは憶良であつて、赤人でないと断じてゐる。(100頁)

と「好去好来の歌」に触れたものや、岡麓の「古事記燈を読む」(『アララギ』大正14年1月~3月)のように、富士谷御杖の『万葉集燈』の言霊論に言及し、さらに『古事記燈』について、

「燈」の第一章は「上卷非史弁」である。この神代卷は歴史ではなくつて、ひろく貴賤にわたして心法とせよとの教であり、この教である神典を著述されたのは神武天皇であり、此上卷の事々は神武天皇の大御身のうちなる御神だちと、天下衆人の身中なる神とのやんごとなき道を御説きあそばされたのである。(『アララギ』大正14年2月、128~9頁)など、詳細に解説した文章も含まれている。保田は、このような記事を通して、『万葉集』や富士谷御杖への関心を深めていったものと考えられる。

さて、「好去好来の歌」論の冒頭、保田は、
「神代より言伝て来らく、虚みつ 倭の国は 皇神の厳しき国 言霊の幸はふ国と……今の世の人も委 目の前に 見たり知りたり……」

と、山上憶良の長歌「好去好来の歌」の一部を引用し、こゝで「こと」は対象として、変化、即ち歴史であり、かゝるものの自らの統御に「ことだま」は意味づけられた。神の絶対意志が、歴史的必然の姿でそこに肯定されてゐるのである。(『思想』昭和5年8月、87頁)

と論じている。この部分に註が付され、「言霊の考察については、富士谷御杖、「古事記燈」「万葉集燈」及び城戸幡太郎氏、「古代日本人の世界観」、殊に最後のもの示教を受く」とある。ここで名前の挙げられている城戸幡太郎『古代日本人の世界観——日本の言語と神話』(昭和5年2月、岩波書店)については、奥山文幸氏が先引の論稿で、保田の「日本の橋」との関連性を指摘している。(52~3頁)ここでは、「好去好来の歌」論に対する影響に限って考察したい。

城戸は「ことだま」という言葉の「こと」に関連して、以下のように述べている。

「こと」は対象となつたもの、なつてゐるもの、なるべきものを意味してゐる。それで「こと」は単なる「もの」ではない。「こと」は変化をあらはす時間的存在であるが、「もの」は単に実体をあらはす空間的存在に過ぎぬ。(44頁)

保田のさきの記述の前半部分は、「こと」が「対象」であるとともに「変化」つまり時間的な存在であるとする理解において、城戸の著作を踏まえている。後半部分も、言霊が人間の意志を超えた一つの必然の現れを意味するという点で、

事物が自然に顕明されることを事理といひ自然に化為することを事業といふのである。そして事物が自然の事理に依つて実行されることを事行といふので、事柄が自然の法則として宣言される真理を古代の思想では命或は真事と称し、命が事依さすことを宣命といつたのである。そしてかゝる宣命は言霊の顕現であつて徒らに人間が勝手な宣言をしなくとも真事は厳しくも実現されて人間は自然に幸福を享け楽しむことができるのである。(51頁)

という城戸の論述を下敷きにしてゐる。城戸はこれにつづけて、「古代日本民族の言霊信仰を最もよく表現してゐる言葉」として憶良の「好去好来の歌」を引用し、「古代日本民族の言霊信仰を最もよく表現してゐる言葉である」として、次のように論じている。

神主が別に祭祀するやうになつたのは君主が統治をするやうになつたからである。「まつりこと」が事霊の宣命によつてなされてゐた時代には人間は「神ながら」に幸福を享樂することができると信ぜられてゐたのであるが天皇が統治をすることは事祝くことではなく、事向くことで明かに神々の言挙である。(52頁)

これは「ことだま」の幸ひがまさにその「消滅せんとする」時期において歌われたという保田の議論と照応するばかりでなく、「戴冠詩人の御一人者」における、天皇の支配権が確立し「祭祀」と「統治」が分離したとき言霊信仰が崩壊したとする発想の原型を示すものと考えられる。

城戸の著作は単なる古典解釈の書ではなく、古代日本人の思想をマルクス主義によって解説するという独自の発想に立つものであった。

古代の日本民族はこの葦原中国を言霊の幸きはふ国、神ながら言挙げせぬ国と称してゐたのであるが、彼等の思想に於ける事と言との同一原理は神霊の宣命として汎神論的実在論によつて満足されてゐる。(中略)その神なりロゴスなり社会なりが何らかの意味で矛盾を含む実在であるならば、かゝる実在論は単なる本体論としてではなく弁証論として実践的運動を要求してくる。(中略)社会は階級闘争の時代である。これを止揚する力は果して人間

を超越した自然必然的な絶対の世界法則に事依さして自然ながらに言挙げもせず法則の命ずるまゝに世界を達観してゐてもよいのであろうか。

(53～4頁)

ここに展開された城戸の論法は、マルクス主義に強い関心を懐き始めていた保田に大きな印象を与えたにちがいない。マルクス主義の立場から「好去好来の歌」を分析するというアイディアの源泉の一つは、ここにあると考えられる。

つづいて保田は、日本の神話に言及する。

即ちその神話は日本統一の政策の神話的表現であり、しかもこの理想は「ことだま」自体により必然的実現を信じたのであつた。之は既に富士谷御杖の如き進歩的堂上学者の明記したところである。(88頁)

保田は、自らの言霊解釈が富士谷御杖に依拠したものであることを明らかにする。保田はここで、明らかに、土田杏村の御杖解釈を参照している。

富士谷御杖の学問的業績を再発見し、国文学研究の方法論として再評価したのは土田であつた。土田の論文「御杖の言霊論」は、はじめ「富士谷御杖の言霊論」として『学苑』大正十五年八月号に発表され、のち論文集『国文学の哲学的研究』第一巻(昭和2年11月)に収録された。芸術論としての御杖解釈に充てられているその前半部分は、習作「世阿弥の芸術思想」(大阪高校『校友会誌』昭和4年2月)を執筆するに際して保田によって参看されている⁽⁷⁾。「好去好来の歌」論においては、その後半部分が参照されている。

土田は富士谷御杖について、「彼は富士谷成章の子として、本来堂上歌学の系統を継いでゐる」「かく正統派のアカデミ歌学を継承したが、しかしその主張は甚だ多くの独創を持ち、その論拠は確実であり、自由であつた」(『土田杏村全集』第11巻、40～2頁)と述べ、「御杖の神観及び神話観も亦非常に独創的のものであり、私は深く彼の見識に推服してゐる」(56頁)と評価し、「御杖は歴史から神話を区別した我国最初の学者であると見られる」(62頁)と位置づける。

御杖以前誰れがかくも大胆に歴史と神話とを区別したか。また御杖以後現代に至るまでの間にだれがかくも徹底した態度で神代史を取扱つたか。神代史を神話として取扱ふことは、今なほ一部の固陋者から国家の基礎を危うする危険思想のやうに見られてゐるのではないか。(中略)御杖は正しい意味に於いて最初の神話学者であつた。はじめて神話学に歴史哲学の方法論的基礎を与へた人であつた。(62～3頁)

保田が先に、記紀神話は国家統一の「神話的表現」であり、このことは富士谷御杖が「明記」していると発言しているのは、こうした土田の議論を踏まえたものである。保田は、先の部分に註を付して、

古事記燈・御杖・古今書院本／「神武帝の御祖もこの帝の御世までは、たゞ一方の魁首にておはしましけんとおぼしき也」(同十一頁)といふ記述によつても御杖の科学的態度の一片がうかがはれるであらう。(88頁)

と述べている。『古事記燈』からの引用は、

かうした見識を持つた御杖であつたから、歴史を取扱ふ場合の彼の態度も亦非常にリベラルなものであり、些かも他により拘束せられた形跡を示さない。(中略)「とにかくに此帝、この御国を一統し給ひて天子となり給ひし事疑ひなく、(中略)されば神武帝の御祖も、この帝の御世まではただ一方の魁首にぞおはしましけんとおぼしき也。」(同上、一一頁)(前掲、63～4頁)

という土田論文と一致する。「古今書院本」という文献名の提示は、保田の勉強家ぶりを示すとともに保田が土田を参照したことを逆にものがたっている。御杖の態度を「科学的」と保田が評しているのも、「彼の国文の分析は余りにも科学的に徹底したものだ」(40頁)という土田の評価をなぞったものである⁽⁸⁾。

第三章 マルクス主義(一)——エンゲルス・福本

すでに指摘されているように、そして保田自身が論文中で明示しているように、「好去好来の歌」論は、エンゲルスの『家族、私有財産及び国家の起源』を参照している。

エンゲルスのこの書は、大正十一年一月に有斐閣から内藤吉之助訳で出版され、つづいて西雅雄訳で昭和二年三月に白楊社から上梓された。西雅雄訳は昭和四年に岩波文庫に収められた。保田が参照したのは、訳文などからして後者と思われる。以下、引用は西雅雄訳の白楊社版による。

保田は、日本が「狩猟制」から「農業社会」へ発展していく過程で、労働力獲得のために「侵略」が行われたと論じる部分で、エンゲルスを引いている。

しかもかゝる転形期に付随する特徴はエンゲルスも云ふ如く侵略である。「復讐とか領域の拡大の爲めではなく、今や単なる掠奪のため」戦争は行なはれ、「それは正規の獲得」の一手段となつた。(保田、90頁——下線引用者、以下同)

保田は、ここに「「家族私有財産及び国家の起源」(エンゲルス)」と註を付している。これはエンゲルスの以下の部分を指している。

「以前はただ侵略に対する復讐のため又は狭くなつた領土の拡張のために行はれた戦争が、今や単なる掠奪のために行はれ、日常の営利部門となる。」(エンゲルス、297頁)

訳文は必ずしも一致していないが、西雅雄訳が参照されていることは明白である。

これ以外にも、明示はされていないが、エンゲルス

からの引用である箇所を指摘できる。

だが、る農業生産の急進と工業の過程に於て、その侵略戦の陣営の中に既に氏族制度の墓穴は大口をあげてゐた。氏族制度の寿命は終つてゐたのだ。それは分業及び、その結果たる社会の階級への分裂に依つて破壊せられてゐた。それは国家である。」日本の国家はかゝる時代に成立した。(保田、90頁——以下、下線引用者)

新しく防備を固めた都市の周囲をめぐる脅かすが如き城壁は徒らに立つてゐるわけではない——その壕には氏族制度の墳墓が大口を開け、そしてその尖塔は既に文明の中にそゝり立つてゐる。(エンゲルス、297頁)

氏族制度は生命を終へた。それは分業及びその結果たる社会の階級分裂によつて爆破された。それは国家によつて置き代へられた。(エンゲルス、307頁)

大化改新後の状況を私はこゝに表記しよう。／a. 金属貨幣の出現、それと共に貨幣資本及び高利の出現。／b. 生産者間の仲介階級。c. 土地私有及び抵当権。d. 奴隷より農奴へ。e. 都市と田舎の固定化。(保田、93～4頁)

それを以て文明がはじまるころの、商品生産の段階は、経済的には次の如きものの移入、即ち(一)金属貨幣、従つて貨幣資本、利子及び高利の、(二)生産者間の仲介的階級としての商人の、(三)私有土地財産及び抵当の、(四)支配的生産形態としての奴隷労働の移入によつて特色づけられる。(中略)更に文明にとつて特徴的なのは、一方には全社会的分業の基礎としての都市と農村との対立の固定されたこと、他方にはそれによつて資産家とその死後においても尚ほその財産を処分することが出来るころの遺言制が移入されたことである。(エンゲルス、321～2頁——以上、下線引用者)

以上挙げた部分では、明らかにエンゲルスが参照されている。しかし、それを除けば、両者の対応はそれほど緊密なものではない。たとえば、エンゲルスにおいて重要な意義を担っている男女の分業についての指摘などは、保田によってまったく無視されている⁽⁹⁾。

保田の「好去好來の歌」論とマルクス主義の関連に関して、エンゲルス以上に注目されるのは、その文体における福本和夫の影響である。

福本の登場は、はじめ、マルクスの方法論に関する学術論文のように見えた⁽¹⁰⁾。やがて、日本共産党解党後も引き続き指導的な立場にあった山川均の「方向転換論」に対する根底的な批判であることが明白になる。日本共産党(第二次)再建に中心的な役割を果たした福本は、コミンテルン「二七年テーゼ」によつて批判され、昭和五年当時すでに党内においてその権威を失墜させていた。しかし、マルクス主義文学運動のうち

には、「揚棄」という訳語とともに、その影響がまだ強く残存していた。

福本の文章のスタイルは、極めて特徴あるものであった。たとえば、北条一雄名義の以下の文章などはその典型である。

我が無産者階級は、其の發達の必然により、今や所謂「方向転換」期にある。其の闘争の戦線——大衆運動政治運動へ——「転換」し拡大せんとしつゝある。／語を換へていふならば、無産者階級は、今や始めて、其の組織過程を其の全域に於て生活し闘争せんとしつゝあるのである。即ち今、其の全域に於ける組織過程の第一段階を踏みしめんとしつゝあるのである。／而して無産者階級の生活過程に於けるかゝる「転換」はまた自ら必然に、其の切実に認識するを要するところの理論の「転換」を導かずにはゐられない。／しからは、「方向転換」期にある我が無産者階級はしかるものとして、今いかなる認識、いかなる理論を最も切実に要求すべくまたするであらうか。(「階級および階級闘争論(一)」『マルクス主義』大正一四年八月、8～9頁)

福本の文体の特徴として、まず「かゝる」という指示代名詞の頻用を挙げることができる。保田の「好去好來の歌」論には、「かゝる」が三十六回出現する。「のである」という語尾も、福本のスタイルの特徴であるが、保田の論文にこれが十九ある。このほか、保田の論文に、「こゝに」が七回、「かくて」「しかも」がそれぞれ四回、「如く」が三回、「だが」「明白」がそれぞれ二回、「今や」「而して」「所謂」が各一回見えるのも、福本の文体の影響と考えてよい。また、十二回出現する註釈のためのダッシュも福本の模倣である。

内容的な面についていえば、保田は「必然」という言葉を十九回使用しているが、これは福本の愛用の言葉である。歴史過程の必然的な展開は現実運動の内包する論理のうちに正確に写し取られるというのが、福本がマルクスから学んだものであり、「理論闘争」という福本の提起はここから導き出された。

福本は、たとえば河上肇のように、マルクス主義を「唯物史観」つまり経済的な決定論として解釈する傾向にあった学問的レベルを転換させ、マルクスにおけるイデオロギーの意味を日本ではじめて明らかにした思想家であった⁽¹¹⁾。保田の「好去好來の歌」論には、古代天皇国家の成立をひとつの「必然」としてトータルに捉えようとする試みである点において、福本イズムの精神がはっきりと刻印されている。

ただし、福本の文体の影響はこの時期のマルクス主義文献の全体に浸透していたから、保田に対する影響も、直接福本の著述に由来するというより、マルクス主義文献のうちに瀰漫する福本スタイルを学んだと考へた方がいいかもしれない。

第四章 マルクス主義(二)——野呂榮太郎

さて、保田は「好去好来の歌」の時代背景について次のように叙述する。

西洋紀元で二世紀末頃と想定される紀の崇神頃より社会史は記述し初められた。狩猟制は全然この時代に駆逐され、農業共産制は漸次生産の増大と複雑とにより、身分的分化起り、百姓の動乱の起つた如きは明かに利害関係の分離、即ち階級社会の進行を示すものである。しかしてこの頃より漸次任那、新羅及び漢とも交通あり、工業も新羅より伝来し、こゝに農業社会として要素備り、かゝる時代に尚文化の指導者であつた皇室中心の土地開拓は活潑に計画されることとなつた。かゝる時代の認識に於てわれわれは外国文化の働きかけを忘れられない。(89頁)

この部分は、日本の歴史に即して、狩猟制から農業社会への展開が生産力の増大をうながし、その結果、階級分化を生み出したことを記述しており、理論構成としてはエンゲルスに依拠したものであるが、日本の古代史を踏まえた叙述はエンゲルスにはもちろん、福本和夫にもない。こうした知識を保田はなにに学んだのか。

当時のマルクス主義からする日本史分析の水準において、昭和五年二月に鐵塔書院より刊行された野呂榮太郎『日本資本主義発達史』は傑出していた⁽¹²⁾。野呂は主に『思想』を活躍の舞台としており、『思想』の原稿公募に応じようと論文を構想していた保田が、マルクス主義の若き論客の全容を呈示した著作に惹きつけられなかったはずはあるまい。

野呂は『日本資本主義発達史』第一章冒頭に「日本資本主義前史」という節を設けて、「生産力の発達」が「血族団体」としての「氏族制度」を内部から解体させ、その結果「土地の公有」を原則とする「大化の改新」が成立し、さらにそれが内部矛盾から「荘園の発生」へと至る過程を概観している。保田の先の記述とそれに続く以下の記述は、明らかに野呂の議論を踏まえたものである。

かくの如くして氏族制は徐々に破壊されつゝあつた。共産社会の身分分化、人口増加、労働の集中—そこから首長権利者が出現し、之が土地豪族化した。かくて生産力の発展の結果と人口増加は以上の原因にもとづき氏族制の純粋性を消失せしめねばおかない。かゝる状態に対する反動政策の一つとして允恭四年九月の盟神探湯は意味づけられよう。氏族制は個人的家族制へと徐々に社会革命を起しつゝあつた。かゝる内部的矛盾—生産力と生産関係の—即ち土地開拓、大陸文化の接触の将来した発達せる生産力は、古い血液関係や土地共有性を必然的に突破した。(91頁)

特に「盟神探湯」にふれた部分は、野呂の、

かゝる内在的矛盾は、部民や奴婢の隷属の結果、同祖神に対する信仰の希薄化せると相俟つて、既に建国当時に於てすら、氏族制度の存続を脅威しつゝあつたことは、氏と姓との関係の紛乱を糾すがために、古くから盟神探湯なる慣行の存在したことに依つても知られる。而してこの氏族の紛乱が次第に甚だしきに至つたことは、「日本書紀」允恭天皇四年九月(西暦四一五年)の条に「上下相争ひ、百姓安からず、或は誤て己が姓を失ひ、或は故らに高き氏を認む。其治に至らざるは、蓋し是に由て也」と宣し、盟神探湯を行へりとあるに依つても明かである(岩波文庫、25~6頁)

という部分と対応している。また、保田が「大陸文化」に言及しているのも、野呂の、

生産力と生産関係、財産関係との矛盾は、延いて信仰上の破綻と政治上の対立を生むに至つたが、殊に朝鮮及び支那との交通開け、儒教、仏教の輸入せらるゝに及んで弥々その矛盾の対立を相互作用的に尖鋭化し、遂に天皇及び大臣、大連等の強勢なる諸氏間の不可両立的抗争に依つて、既に久しく形骸と化せる氏族制度は壊滅に帰し、茲に大化の改新を見るに至つたのである。(27頁)

という部分を参照している。

保田がこれに続いて、

大化改新の革命思想は聖徳太子に既に十分に含まれてゐた。中大兄王子と鎌足によるこの革命は厳密な意味で社会革命として「社会の政治的及び法的上部構造の広汎なる全体に互つて、社会の経済的階層の変化からくる徐徐たる若しくは急劇なる変革」といふ範疇に入らないが、(かゝるマルクスの意味で階級と階級の決戦でなかつたから)生産関係と生産力の矛盾の打破、社会の政治的権力の変化に於て確に革命と云はねばならない。(91~2頁)

として、大化改新の「革命」としての性格に論及しているのも、「大化の改新」を「革命的変革」(27頁)とする野呂の規定にこだわったものであろう。引用されているのは、マルクスの『経済学批判』であるが、これについては後に触れる。

また保田が、続けて「この革命を日本的でなく支那風だといふのは歴史的必然を認識し能はぬブルジョア歴史家の解釈である」(92頁)とコメントしているのは、野呂の、

大化二年正月(西暦六四六年)に於ける革命的変革を以て、単なる唐制の模倣なりとし、当時に於ける我が経済上、政治上、社会上に於ける発達に比して尚早に過ぎたるものとなし、従つてやがて荘園の発生、封建制度の発達を見たるはこれが反動であるとなす者があるが、当れりとしな

い。さしもの大変革が比較的容易に実行し得られたのは、既に之れを可能ならしむべき客観的条件が十分なる成熟を遂げてゐたが為めに外ならない。(28頁)

という評価をなぞったものである。

保田と野呂の著作の最も緊密な連関性を証するのは、大化改新以後の荘園制の発生にともなう「奴隸」から「農奴」への転化について語る部分である。保田は先に引いた「大化改新後の情勢」について箇条書き風に記述した部分で、ほぼエンゲルスの規定を踏襲しながら、エンゲルスの「奴隸労働の移入」を「奴隸より農奴へ」と書き換え、これに関連して、以下のよう

に述べている。

奈良朝に入つて私有制度確立後はしばしば奴隸解放の詔が發布された形勢がある。之の状勢は奴隸制度が農奴制へと転化する次序と考へねばならない。当時の詔が一片の人道主義から發布されたのではなく、既に奴隸の必要は農奴へとその位置を譲つたものと考へられる。公民は国司の苛税の爲め荘園に逃れ、その荘民となり公地は「地ありて人なき」有様とさへなつた。荘園に入り込んだ人民らは、そこで奴隸の代りに土に結びついた農奴として成立した。故に平安初期にさかんに現れた奴隸解放の法令は社会関係が奴隸を不用とした(かくて農奴が出現する)一つのあらはれである。(94頁)

この指摘は、第一に、荘園の成立とともに「奴隸」が「農奴」へ転化した、第二に、農奴が土地を契機とする関係である、第三に、農奴制が奴隸制の再編であるという理解において、野呂の規定をはっきりと受け継いでる。

野呂は、この点について、以下のよう

に論じている。「公田減少の結果」政府は「弥々重税を課」し、さらに「口分田耕作者」の逃亡は増加した。かくて「墾田」は「少数大地主の手中に集中せられ」、**「私墾田の兼併」**が盛行し、**「荘園の発生を見るに至る」**。(32～3頁)

今や人と人との関係は唯土地を通してのみ理解せられる。土地の所有関係を度外視した人的結合関係はもはや殆んど何等の社会的強制力をも有せざるに至つた。平安朝の中葉以来、事実上、奴隸制度が従来の意義に於ける重要性を失ふに至つたのは之が爲めである。隨に従来の奴隸制度は重要性を失つた。併し奴隸制度そのものが廃止されはしなかつた。唯異なる形態の下に再編成されたに過ぎない。否、従来よりも更に――広汎なる基礎の上に拡張再生産せられたに過ぎない。土地の私有、即ち封建的土地領有の包括的基礎の上に、一種の奴隸制度たる所謂農奴の制度は確立せられたのである。(35～6頁)

野呂の著作が、その後「日本資本主義発達史講座」

へと発展し、講座派という一大スクールを生み出し、日本のマルクス主義の主流派を形成することを考えれば、保田の着眼は卓抜であり、そのジャーナリスティックな才覚を示すものといえよう。

第五章 芸術論の試み——中野重治(一)

保田の「好去好來の歌」論は、単にマルクス主義の方法を日本古代史に適用したというだけのものではない。日本の古代歌謡をマルクス主義の立場から検討したというところに、つまり文学評価のうちにマルクス主義の理論を適用したところに、保田の議論のユニークさがあつたのである。そして、ここに中野重治の影響を指摘することができる⁽¹³⁾。

『マルクス主義講座』第十卷(昭和3年10月)に発表され、『芸術に関する走り書』(昭和4年9月、改造社)に収録された、中野の「芸術について」は、マルクス主義の立場から芸術論を構築しようとする先駆的な試みであり、その点で保田の論文に大きな影響を与えているように見える。

冒頭、中野は、

マルクスから今日までの永い年月のあいだに作られたさまざまに豊富なマルクス主義文献のうち、芸術に関して説かれまた述べられたところのものははなはだしく非常に少ない。しかもこのはなはだしく非常に少ないところのものほとんどすべては、それが一般の一原理的説明であるために、その説明がそれ自身正しいにもかかわらず、われわれの闘争に関する部分における具体的規準をそこから直接に引きだせないような種類のものであるか、さもなければ、それがわれわれの闘争の芸術に関する部分における具体的問題の解決をテーマとしているために、その解決が正しく、それゆえそこに解決された範囲では解答がすぐさま実行に移されうるにもかかわらず、芸術に関する一般的一原理的説明、その体系づけられた見取り図、いわばその正確な地球儀をそこから引きだすことが困難な種類のものであるか、どちらかである。(『(定本)中野重治全集』第9巻、179～80頁)

と、マルクス主義芸術論の貧困を指摘する⁽¹⁴⁾。このような問題意識に貫かれた論稿に、芸術の問題に深い関心を懐いていた、しかもマルクス主義の影響を受けつあつた保田が惹きつけられなかつたはずはない。

中野は「具体的な現象から進むことにする」として、「子守歌」「インタナショナル」「われらは赤旗を護る」などを取りあげ、「これらの歌はそれぞれ、子供の安らかに保護されている感情、プロレタリアートの国際的連帯性の高揚への感情、戦いつつある勇気をかきたてた」と論じ、ブハーリン⁽¹⁵⁾やプレハーノフを引証しつつ、芸術は「人間の感情を組織する一つの社会的手段であることを知るのである」と結論する。(184～6頁)

さらに中野は室生犀星や俗謡などを引き、芸術の行う「感情の組織」は「現世において人びとの置かれているそれぞれの環境に相応じて弁別されること」を例証する。(192頁)

このように芸術とは何かを考察した後、中野は「芸術はいかに発達してきたか」という問いに取りくむ。中野は「芸術の発生」は「自然に働きかけるというその労働、すなわちその社会的生産力の状態」に求められると論じ、このことを最も明らかに示すのは「労働の歌」であるとして、以下のように論ずる。

アイヌ族のあいだに見られるいわゆる熊祭り、その狩猟に關係する踊りと狩猟に關係する歌との一つの総合的表現であると見られなくてはならない。その他、わが国において、狩猟、牧畜、漁獵等に比較してより多く発達した農業労働のなかにそれらのおびただしく多くのものが見出される。

(198頁)

中野はここに付された註で「次ぎに示されるところのものは、われわれの(?)祖先が歌いながら酒を醸したことを示すものであろう」として『古事記』を引く。

「ここに建内の宿禰の命、御子のために答へて歌ひけらく、この御酒を醸みけむ人はその鼓臼に立てて歌ひつつ醸みけれかも舞ひつつ醸みけれかもこの御酒の御酒のあやにうた楽しささとうたひき。こは酒樂の歌なり。」

(『古事記』「仲哀記」)(201頁)

中野は、生産力の発達と芸術の発達の連関性というマルクスの理論を、古代歌謡を例として実証しようとする。こうした中野の議論は、「好去好來の歌」のうちに国家生成過程を読み取るというアイデアを、確実に保田に示唆したはずである。

この後、中野は現代の状況へと論を展開し、エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』を踏まえて、「数多の考証はわれわれに、生産力の発達が人間の社会的分化を結果し、それが人間の階級への分化を結果したことを教えている」と論じ、

社会の発展のなかに映しとられるところの生産力の発達は、いまやこの関係——人間の搾取と被搾取との関係、階級と階級との関係、階級と階級との闘争の関係(搾取する階級と搾取される階級との関係はその両者の闘争の関係以外にありえないから。)のなかに映しとられるようになる。生産力の発達が芸術の発達をもたらした。いまやわれわれは、そのことを、階級と階級との闘争の発展が芸術のそれをもたらしたと言わなくてはならない。(201~2頁)

と論じている。中野はこの註でマルクス『経済学批判』の一節を引いている⁽¹⁶⁾。

「経済的基礎の変化に伴つて、巨大な全上部構造

が次第にまた急速に変革する。かかる変革を考えるには、経済的生産諸条件の物質的、自然科学的に忠実に確認される変革と、法律的、政治的、宗教的、芸術または哲学的、一言に言えば観念体系的諸形態、すなわちそれによつて人びとがこの衝突を意識し、これと戦い決するところのものを常に区別しなくてはならない。……かかる変革の時期をその時期の意識状態から判断することはできない。否、かえつてこの意識をば、物質的生活の矛盾、すなわち社会的生産力と生産関係との既存の衝突から説明しなくてはならない。」(マルクス『経済学批判』)(205頁)

マルクスの文意は明白である。「経済的生産諸条件の物質的」な変革と、芸術、哲学など「観念体系的諸形態」の変革とを区別したうえで、前者によって後者が根拠づけられなければならないということである。

これを踏まえて中野は「労働者の歌の変化は、労働者階級と資本家階級とのあいだの闘争の進展以外の何ものにも基づきえない」(202頁)と指摘し、「かつて恥じめられ抑圧されていた階級が起きあがってくる時、下にあつたものが立ちあがりそのために上にいたものが顛落するときに芸術がそれ自身を変化させる」と述べる。(203頁)

保田が、大化改新が「革命」であるという文脈でマルクスのこの文章を引用していることはすでに指摘した。しかし、保田の議論は「今日迄の階級社会に於ては貧富懸隔を排除するためなどの如き理由で決して革命は起らなかつた」(92頁)と、革命の主観的意図という見当違いの方向へとずれていく。

したがって保田は、芸術と社会革命の関係を別の論理で接合する必要にせまられた。

かくの如くして成立したものは国家の階級社会としての儀装であり、国家権力と帝王神聖観念の発生である。故にこの時代は歴史の潮流にのつた時代として、矛盾排除への時代として史上稀な活気ある時代を出現した。芸術史上は白鳳から天平初期で、万葉集成立の中心をなし、薬師寺三尊仏彫刻・法隆寺壁画の如き驚嘆すべき世界的傑作が出現した。大小の詩人は皇室の未曾有の繁栄と、民族の発展をうたひ、絶対意志の発露としてことだまを心から讃嘆した。以前の氏族時代の皇室観念はもつと嚴重な広い意味に拡大せられた。しかしかゝる階級社会は同時に階級対立・階級闘争を必然ならしめる。帝国讚美の傍で、如実な不平と呪詛が、家庭や父母・兄弟・家族・恋人等を通じて浪漫的反抗の形式で表現された。(93頁)

保田は言霊をことほぐ「好去好來の歌」を、白鳳天平の文化と合わせて、国家がその階級性を隠蔽する「儀装」として解釈し、「不平と呪詛」と「浪漫的反抗」をそれに対比させる。保田はここに「かゝる傾向は天平

に至り激化した。東歌、防人歌の多くがそれである。憶良はこの代表であつたと註している。憶良の「貧窮問答歌」を意識した発言である。

保田はつづける。「私有制度確立、土地公有崩壊の爲め、公地公民を中心として基かれた皇室中心神聖観念は急速に瓦解し初めた。」

かゝる時代の社会意識形態の好個の典型を旅人と憶良に見るのである。前者は逃避的デイレツタントとして「讃酒歌」を歌ふに反し、後者は社会主義者らしい情熱で「貧窮問答」を叫ぶ。前者の頹廢的形式は家持の裝飾主義に迄墮し去る。しかし裝飾的芸術の發生の爲には必然的に背後の生産関係の高昇を待たねばならない。それ故推古の、例へば法輪寺の秀れた虚空蔵菩薩は決して天平に出現しなかつたし、天平の三月堂の宝冠の彫刻芸術も推古に考へられない。(94～5頁)

しかし、このような理解においては、中野の論文において展開された、芸術と社会のダイナミックな相関関係は平板化され、芸術を規定する社会的状況にかかわる固有の問題も見失われてしまうほかはあまりない。

「階級対立・階級闘争」「社会意識形態」「生産関係の高昇」など、マルクス主義的な用語が目立つが、保田の叙述の基礎をなしているのは、先の白鳳天平文化への言及も含めて、大阪高校『校友会雑誌』第八号(昭和5年2月)に掲載された習作「上代芸術理念の完成」の執筆に際して参照した⁽¹⁷⁾、土田杏村の「裝飾芸術の理想と天平文化」(『国文学の哲学的研究』第2巻)である。土田は、推古・白鳳から天平・弘仁への展開を「構成的と裝飾的」という図式において捉え、

随つて卓越した仏像にも裝飾的な要素が少なからず含まれてゐる。例へば三月堂本尊の宝冠である。(中略)これを美術的に見るならば、宝冠は構成的である以上に既に裝飾的になつて来たものと断じなければならぬ。(中略)薬師寺の本尊脇侍から三月堂の本尊に移る間に、換言すれば白鳳時代から天平時代へ移る間に、時代精神にこの重大なる変化が現はれてゐることを我々は看過する訳にいくまい。(『土田杏村全集』第12巻、299頁)

と論じている。

三月堂本尊の宝冠に関する保田の議論が、土田の議論を踏まえていることは明白である。保田は「構成的」から「裝飾的」という土田の図式に、「氏族制度」から「階級国家」への転換を説く野呂栄太郎の理論を当てはめ、「背後の生産関係」に言及するのである。

この辺りの展開には、二か月前に保田が発表した小文「懷風藻所載宇合作五言一絶につき」(『炫火』昭和5年6月)が踏まえられている。その中で保田は『万葉集』所載の高橋虫麿の短歌と『懷風藻』所収の藤原宇合の漢詩を比較しつつ、

「御民吾」といふ帝王讚美のことばが決して天平

のすべてでない。しばしば辺境防備の平民奴隸の切実な生活の反影とその表現に反抗と呪詛がしみこんでゐるのを知るのではないか。東歌を防人歌を苦役人夫の作品を見よ。(中略)／從來厭離此穢土—／と歌ふ詩人憶良を単に唐土模倣の新思想家とけなし去つてはならない。「貧窮問答」のこの反抗的高風者のみが数少ない名誉ある帝王讚美の一首さへ作らなかつた純粹の歌人であつた。(中略)明に私らは次いでくる家持の時代が享樂と裝飾へともしらねばならぬのを知るであらう。芸術が裝飾芸術となるためには背後の生産関係の發展をまたねばならない。／東歌のある者が、防人歌の數種が何故に帝王讚美のものより私らの心をより強くひくか——そこには真実の現実があり切実の反抗があるからである。然し之らは不平を脱出せぬ弱々しい浪漫的反抗である。(中略)芸術が時代を離れて存在せぬといふわれわれの興味はその時代と社会思想形態にある。今日の時代は人麿よりも憶良を関心するのである。(『全集』第40巻、45～6頁)

と論じている。ここで保田は、憶良から家持への変遷を「裝飾芸術」への展開として捉え、その「背後の生産関係の發展」と「社会思想形態」に言及している。また保田は、憶良を「人道主義的反抗家」と呼び「浪漫的反抗」と評している。これらは明らかに「好去好來の歌」論の原初的なアイディアと認めることができる。「裝飾芸術」という捉え方のうちに土田杏村の影響が、そして「数少ない名誉ある帝王讚美の一首さへ作らなかつた純粹の歌人」「帝王讚美のものより私らの心をより強くひく」というフレーズのうちには、『芸術に関する走り書覚え書』に取められた中野重治の「素樸ということ」(『新潮』昭和3年10月)における、

僕は僕なりに、どんな自然描写も「大風起り雲飛揚す」の一句に及ばないことを知り、『土佐日記』が『十六夜日記』に及ばないことを知り、万葉の歌人でさえ皇帝を褒めたたえた歌は存外くだらなかつたことを知つている。(『(定本)中野重治全集』第9巻、179頁——*は伏字)

という主張に対する共感が看取される。

この「懷風藻所載宇合作五言一絶につき」を踏まえるならば、「好去好來の歌」論のモチーフは「帝王讚美の一首」も作らなかつた「人道主義的反抗家」である山上憶良の作品「好去好來の歌」を、マルクス主義の立場からどのようにトータルに解説すべきかという課題にあったといえる。それは、磯田がいうように「現在」に「幻滅」した保田が「過去」のうちに「未来」の理念を求めたというものではなく、憶良の二つの長歌の間に横たわる矛盾とも見える溝を、新たに手にしたマルクス主義の理論によって解釈しようという試みであつたといえよう。

第六章 浪漫主義批判——中野重治(二)

『炫火』創刊号(昭和5年1月)の「発刊の辞」において保田は、「象徴の極清虚悠久なる東洋的神秘の不滅の韻律を讃仰せよ」「極めて新しきものかさなくば古きもののみが慰めうる不幸なる浪漫精神をもつ倭僮諸子、来りてわれらがつどひを飾れ」(『全集』第39巻、315頁)と呼びかけている。

一年前、大阪高校『校友会雑誌』第七号(昭和4年2月)所載の「世阿弥の芸術思想」で、世阿弥を「人生の現実を正視できなかつた」とする「リアリズム」の批判に対して、「世阿弥は余りにも芸術的だつたのである」(『全集』第40巻、28頁)と弁護した保田が、ここで浪漫主義を提起することは、きわめて自然なことであった。この立場は『炫火』第二号(昭和5年2月)の「編輯後記」においても「不幸なるロマンチケル」たることを自ら意識するわれわれ」と繰り返されている。(『全集』第39巻、317～8頁)

『炫火』第四号(昭和5年5月)の「編輯後記」に至って保田は、プロレタリア短歌の存在を意識しつつ、しとしとにおしよせる過酷醜悪なる現実のその為、わたしらは芸術への逃避を喜んだのだ。然し今や私らの魂を圧迫するものが何なるかを知つたとき、私らは真なる古代なるロマンチックらの伝統を追つて、ちょうど一八四八年二月革命に筆を剣に変えて革命雑誌を発刊せんとしたボードレールの様に、新しい現実をめざすことが今日のロマンチックの純情でなからうか。(中略)浪漫化の現実遊離性は今日積極的に新しい現実の建設へと向ふべきものでなからうか。(『全集』第39巻、320～1頁)と、浪漫主義を「革命」の論理と接合しようと試みている。しかし、このような折衷的態度は批判され、これに応じて保田は『炫火』第五号(昭和5年6月)の「編輯後記」で次のように弁解している。

(b)「過酷醜悪なる現実」についてはあなたの分析の通りです。然も私はあの時御存知でせうがあのプレハーノフの「芸術と社会」にある芸術の為めの芸術の発生の理論を心に考へながら書いたものです。(中略)(g)最後に君に真実の浪漫主義と戦闘的唯物論の世界観を校照思弁——かゝる遊びは君はきらふかもしれませんが——されんことを希望します。(『全集』第39巻、321～2頁)

先にボードレールを例にして提起されたものが、ここで明確に「真実の浪漫主義と戦闘的唯物論の世界観」の結合として語られている⁽¹⁸⁾。「浪漫的反抗」という概念はこの延長上にある。

『炫火』第六号(昭和5年9月)の「編輯後記」に至って、ついに保田はそれまでの自らの立場を否定する。

「炫火」第六冊に示された僕らが余りにも遊離的の顔唐しかあり得なかつたことを恥ぢる。(中略)プ

ロレタリア短歌が存在し得るか否か。此は問題でない。たゞあり得る所にあるに他ならない。それ故「芸術の悲劇性」は芸術の悲劇的でなく僕らのもつ悲劇性(主観的な)であると思ふ。(中略)客観的の状態を見ない時われわれはしばしば余りにも主観的な事情に左右せられる。学園の冬は眼のまへにあれくるつてみる。(『全集』第39巻、322～3頁)

保田はここではっきりと、プロレタリア短歌を肯定する。「好去好來の歌」論が執筆されたのは、まさにこの時期であった。

昭和五年十一月発行の大阪高校『校友会雑誌』第十号に掲載された「芭蕉襍俎」には中野重治の名前が敬愛を込めて明記され、『芸術に関する走り書覚え書』に収録された「啄木に関する断片」「芥川氏のことなど」「ハインリヒ・ハイネを断片する」などが縦横に援用される。ここでも保田を導いたのは中野の芸術論であった⁽¹⁹⁾。保田は、

われわれは近代日本封建社会の認識に於て歐洲のロマンチクを生んだ時代と同一性に於て芭蕉の芸術の揺籃を見ることは出来ない。大革命を経た、その意味で術語上のフランス・ロマンチクは日本に於て明治の時代に出現した。(『全集』第40巻、103頁)

と、日本の浪漫主義をマルクス主義の立場から相対化しようと試みているが、このような認識が、中野重治の、たとえば、

透谷の頭のなかに花咲いた観念論的理想主義はイギリスに咲いたものの映像であつた。イギリスではそれが大地から咲いた。日本ではけれども大地から咲きえなかつた。大地がなかつたのである。それはついに美しい切り花でありむしろ一茎の造花であつた。(「芥川氏のことなど」『(定本)中野重治全集』第9巻、103～4頁)

というような議論から学ばれたものであることは疑いない。かくて保田は、浪漫主義からマルクス主義へと立場を移行させていく。

昭和六年一月発行の第十号をもって保田は『炫火』の編集を後輩に譲ることになるが、その「編輯後記」で、創刊号以来「旧歌壇は根底からぐらつきだし」プロレタリア短歌が決定的に進出した事実に触れ、これに応じて自分自身の立場にも「大きい変化」があったことを認め、「プロ短歌の文学の誤謬を論及した」のは「今日の所謂プロ短歌を感心せぬといふ」ことであると弁明し、保田は次のようにつづける。

「扇動」の意味に於ても私は某々君等と意見を異にする。よい作品でなくしてどうして「扇動」があらうか。文学の「扇動」は「素材」の「扇動」でない。そこに感情の組織者としての文学技巧の優位がある！(325～6頁)

ここには中野重治の影響が明瞭に現れている。すで

に見たように中野は、プレハーノフなどに基づきながら、早くから芸術がプロレタリアートの「感情」を「組織」する手段であると主張していた。同時に中野は『戦旗』昭和四年四月号に「われわれは前進しよう」と題して掲載され、『芸術に関する走り書覚え書』に「序」として組み込まれた論稿で、「感情を組織する」という概念の曖昧さを自己批判し、

芸術の役目をわれわれはどう考えていたか。ざつと次ぎのように考えていた。／「芸術は感情を組織する一つの社会的手段だ。プロレタリアートはそれを取りあげる。芸術がプロレタリアートの組織事業に結びつけられる。そして結びつけられはじめた。」／それに間違いはない。だが組織事業に結びつくとは具体的にどんなことなのか。それは党の強力化、党の大衆化、明確なスローガンをかかげた党の闘争とどう関係するのか。すべて曖昧であった。(中略)／われわれは今日はつきりと次ぎのように考えなければならない。／「芸術の役目は労働者農民にたいする党の思想的・政治的影響の確保・拡大にある。すなわち、労働者農民に共産主義を宣伝し、党のスローガンを大衆のスローガンとするための広汎な煽動・宣伝にある。」(『定本』中野重治全集 第9巻、230頁——*は伏字)

と論じた。「よい作品でなくしてどうして「煽動」があらうか」という発言は、保田が中野の芸術論を受け入れたことを示すものであるが、中野の芸術論の中核をなす党の指導性という観念は、ついに保田には理解されなかったように見える⁽²⁰⁾。

最後に保田は後輩に後事を託し、「今後如何なる方向に「炫火」が進むにしても、(そういふ事は当然だ)若し「炫火」の発行を嚇す権力に対しては、我々は、又我々の先輩は共に極力之を抗争することを断言する」と激励して「編輯後記」を終わっている。(327頁)ここに「発行を嚇す権力」とあり、「芭蕉襦俎」に「筆をとるべき僕が最もいやしむべき事柄の為に鐵鎖にくゝられた文字を弄せねばならぬ」(106頁)とあることに関連して、復刻版『コギト』「解説」(昭和59年9月、臨川書店)で田中克巳が、大阪高校三年の時に保田が「共産党の主刊紙「戦旗」を購読していることが、学校に知れて謹慎処分を受け、これは掲示された」こと、「東大教授河合栄次郎博士の思想善導講座」をきっかけに「ストライキ」があったことなどを証言している。(3～4頁)また、岩本真一氏は「保田與重郎における「浪漫主義」の形成——「逃避」から「反抗」への転回」(『史境』平成8年年3月)で、大阪高校の同窓生の回想など踏まえながら、昭和五年十一月二十五日から二十七日に至る「ストライキ事件」について詳しく考察している⁽²¹⁾。(22～4頁)

学芸部員として『校友会雑誌』の編集を担当し、また短歌会誌『炫火』の編集にもあたっていた保田は、

全国の高校の学芸部や短歌会とも交流があり⁽²²⁾、その学園事情にも通じていたと考えられる。保田が大阪高校のストライキ事件において中心的な役割を果たしたとすれば、それは決して偶然ではない⁽²³⁾。

第七章 バリケードの側へ——中野重治(三)

『炫火』第十号には、保田の「短歌はどこへゆく? ——「怖ろしき理知」及び「Cogito (コギト)」について」と題するエッセイが掲載されている。この年の四月に東京帝国大学に進学した保田は、翌昭和七年三月に『コギト』を創刊するまで、高校の恩師の追悼文「佐々木恆清先生のこと」(『炫火』昭和7年2月)を除いて、作品の発表はない。この高校時代最後の文章において保田が、

云ふ迄もなく芸術家も立場に立たねばならない。具体的に云へば資本家の側に立つか、労働者のバリケードに身をおくかだ。何! それを超越する立場! そんな便宜な立場は歌人のねごとか、頭の中以外に世の中にあるものか。現実を「肯定」した秀れた芸術家はどこにもなかつた。(人は藤村の「若菜集」の序を見よ。こいつなら誰にも公平だらう。詩人藤村は「歌ひ上げ」凡愚の追従者は「歌ひ下げた。)(『全集』第40巻、119～20頁)

というところへまで自らを追い詰めていたことは、記憶されなければならない。保田とマルクス主義との関わりがどの程度のものであったか、とりわけ実践活動に保田がどの程度関与していたのかは、今後検討されなければならない課題として残されているが、昭和六年三月に大阪高校を卒業した保田が、「労働者のバリケード」の側に身を置く人間として自らを規定していたことは疑うことができない。

問題は、『コギト』創刊から『日本浪漫派』発刊へと続く活動において、保田が大きく変貌しているように見える事実である。通説のように、高校時代の保田のマルクス主義への関与をそれほど深刻に受け取る必要はないという立場に立つにしても、また、岩本真一氏のように、保田がマルクス主義を受容したのは自らの内部の「浪漫主義」とそれが共鳴した限りにおいてであると解釈するにしても(前掲論文、27頁)、少なくとも保田がどのような経路を辿ってマルクス主義から離脱していったのかは、保田の思想形成過程を解明する上でも、そして、マルクス主義の解体から日本への回帰へと展開する当時の思想的状況を解明する上でも、重要な研究テーマであることに変わりはない。

「短歌はどこへゆく?」という文章に関して、第一に指摘しなければならないことは、そこに見られる圧倒的な中野重治の影響である。先の一節に、『驢馬』昭和一年十月号に発表され『芸術に関する走り書覚え書』に収録された、中野の「郷土望景詩」に現われた憤怒の、

いまから見てあんなに柔しい初期の藤村さえも、集の序に彼自身言っていたように、(中略)みずみずしい感情と感動とを、それを堰きとめていた石壁に孔をあけて思うさま流しだすことでもつてその仕事を始めた。それは旧来の詩歌観、倫理観、考え方一般にたいする、こういうやり方での宣戦だった。そしてそれにふさわしい迫害をもこうむつたのである。/だが彼は歌いあげた。(そして亜流が歌いさげた。)(『(定本)中野重治全集』第19巻、173～4頁)

という語り口が、はっきりと刻印されている。この他、中野重治の名前が二度にわたって言及され、文章全体を彩る憎まれ口風のスタイル自体が中野の影響を示している。田中克己が「詩時評」(『コギト』昭和11年2月)で、高校時代に「中野重治を僕に紹介したのも矢張り保田與重郎で、彼はその散文を激賞して日本文の典型だといつた」(75頁)と証言しているように、保田の中野への関心は主にそのスタイルに向けられていたといっていだらう。

スタイルから入って、保田は、内容の面でも中野の影響を摂取する。「短歌はどこへゆく?」で、短歌の将来を考察するために、在来の短歌を、「写生」と「回想」と「幻想」の三つに類別し、

アララギでも茂吉はちと種が異なる。僕らは皆茂吉を愛して来た。確かに昔の茂吉は芸術をもつてゐた。ニヒリスト茂吉は今日では文学史の問題だ。(中略)「幻想」とは? 左様、諸君の考へる通り。但し形而上とか哲学とかもこゝへはいる。おしまひに「回想」がある。こいつの根づよさは、風流で、東洋の神秘で、嘆きである。(126～7頁)

と保田は指摘し、

ところでこゝにまあ一つ、一番短歌の中で継子扱ひにされた型がよくみるとある。「さけび」「叫喚」「騒音」といふべきものだ。(中略)ところで私たちの叫喚は、騒音は? それは街頭だ、工場だ、自動車だ、ピストルだ、首だ、屠殺者だ。颶風の破壊が身辺にゐる。レンガの窓の中にゐる。家の中や、野原から見てゐるのとわけがちがふ。肥満した四肢の代りに血みどろだ。爆弾や火薬だ。蛙にしても茂吉の蛙とは生れがちがふ。とにかく「ダイナミックなものへの偏愛」は新しい形式へつれてゆく。(127頁)

と論じている。

ここには、『驢馬』昭和二年六月号と翌年一月号に分載され『芸術に関する走り書覚え書』に収録された、中野の「詩に関する断片」が参照されている。中野は、近代詩を「幻想詩派」「回想詩派」「叫喚詩派あるいは騒音詩派」の三つに分け、

私たちはここにいう幻想詩派を捨てるであろう。ここにいう回想詩派を捨てるであろう。けれども

私たちはここにいう騒音詩派のみは必ずしも捨てないであろう。何となれば、「新しい形式への探求は実にあらゆる革命の本質的なダイナミズムにたいする偏愛からである」(『(定本)中野重治全集』第9巻、6頁)

と論じ、新しい詩の方向性として「叫喚」「騒音」を肯定している。保田が、この中野の結論を短歌論へ転用したことは明白である。具体的な記述についても、「回想」については、中野の「それは常に嘆きであり風流であり東洋の神秘でありランプである」を、「叫喚」「騒音」については、中野の、

それは常に街頭であり自動車であり首であり血みどろであり売淫であり爆弾であり革命でありやけくそであり、ドタン、バタン、クシヤツ、ギユウ等である。それはどうにも我慢のならぬ気持ちであり黒い虚無の風あなである。(同頁)

を、それぞれ下敷きしている。また「ニヒリスト茂吉」という言い方は、『文芸公論』昭和三年一月号に掲載され『芸術に関する走り書覚え書』に収められた、中野の「芥川氏のことなど」の、

茂吉の批評はしかし短歌の批評になるだろう。同時にそれはニヒリスト茂吉の批評になるだろう。万葉の伝統は茂吉において最も近代的に尖鋭化した。(中略)齊藤茂吉と松倉米吉とは短歌史の最後のページであろう。(『(定本)中野重治全集』第9巻、106頁)

から借用されたものである。

この時期の保田にとって、中野の評論集『芸術に関する走り書覚え書』が、自らの文学活動を導く指標であったことは確かである。

高校時代の保田がマルクス主義を受容したことは知られている。しかし、保田のマルクス主義が主に中野重治を経由していたことは必ずしも十分に指摘されてこなかった。すでに見たように、保田のマルクス主義への関心は、中野への傾斜の深まりとともに増大していった。『コギト』初期の保田の評論にしばしば中野への言及が見られるのは、おそらくその名残であろう。

註

- (1) 保田がはやくから雑誌『思想』の熱心な読者であったことは、拙稿「保田與重郎の思想形成——「蝸牛の角」における詭計」(『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学)』平成8年3月)で論じた。
- (2) 「私は、日本ロマン派は、前期共産主義の理論と運動に初めから随伴したある革命的なレゾナンスであり、結果として一種の倒錯的な革命方式に収斂したものにすぎないのではないかと考えている。」「少くとも、現実的に見て、福本イズムに象徴される共産主義運動が政治的に無効であったことと、日本ロマン派が同じく政治的に無効であったこととは、正に等価であるというほかはないのではないか? いずれもが、大戦後の急激な大衆的疎外現象——いわゆる、マス化・アトマイ

ゼーションをとまなう二重の疎外に対応するための応急な「過激ロマン主義」の流れであったことは否定できないのではないか？」(橋川文三「日本浪漫派の背景」『同時代』昭和32年7月、【増補 日本浪漫派批判序説】昭和40年、32頁)

- (3) 「保田の思想と文章の発想を支えている有力な基盤として、三つの体系的構造が考えられる。マルクス主義、国学、ドイツ・ロマン派の三要因がそれである。そして、これらの異質の思想が保田の中に統一の契機を見出したとすれば、そのインテグリティを成立させているものは「イロニイ」という思想にほかならないと私は考える。」(橋川文三「イロニイと文体」前掲書、38頁)
- (4) ここで保田が「円本」と呼んでいるのは、国書刊行会が明治三十一年七月に刊行した『万葉集古義』全九巻を、明治四十五年から大正二年にかけて予約出版として再刊したものを指している。これは大正十一年に四版を出すなど広く流布した。
- (5) 保田の習作が土田杏村の影響下に執筆されていることについては、拙稿「保田與重郎の習作「世阿弥の芸術思想」——日本古典への旅立ち」(『哲学と教育』平成9年2月)「保田與重郎の習作「芭蕉襍俎——模倣と引用のアラベスク」(『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学)』平成10年3月)「保田與重郎の習作期——「上代芸術理念の完成」を中心に」(『日本思想史学』平成11年9月)など参照。
- (6) 先行思想の影響を無視すると、習作「芭蕉襍俎」を「芭蕉に関する本格的論」(井上義夫「保田與重郎の現在」『新潮』平成7年8月、261頁)と評価するようなことになる。また、岩本真一氏の「保田與重郎における「浪漫主義」の形成——「逃避」から「反抗」への転回」は、大阪高校時代の保田について考察した労作であるが、先行思想に対する配慮がまったく欠如している。「好去好来の歌」論について、「こゝには、確かに磯田が指摘するように、マルクス主義の図式的な解釈の影響が色濃く見られる」と認めつつ、「磯田が述べたように、単に社会主義の影響を受けていると言うだけでは充分ではなく、保田の立場、つまり純粋な心情という「私」領域を守り、それを踏みこむ「権力」への反抗していくという考え方に合致するからこそ、保田はマルクス主義を受容したと言えるのである」(前掲、20頁)と心理分析に傾いた考察に止まっている。
- (7) 前掲奥山論文ならびに前掲拙稿「保田與重郎の習作「世阿弥の芸術思想」」参照。
- (8) ここで「科学的」の語には、マルクス主義的な含意はない。同じ昭和初年であるが、二、三年の差で土田杏村と中野重治とでは「科学的」という語のもつ意味が大きく異なっている。土田において科学とはアルタイの「精神科学」あるいはリッケルトの「文化科学」であり、具体的には方法論の重視にほかならなかった。『国文学の哲学的研究』第一巻(昭和2年11月)第二章「国文学の哲学的方法」に「国文学の解釈には他の諸文化科学の知識を補助として借ることが大いに必要とせられている」とある。(『土田杏村全集』第11巻、38頁)
- (9) この点、ほぼ同時期に発表された山部六郎「日本氏族制度に関する二三の論点」(『プロレタリア科学』昭和五年六月)は、同じくエンゲルスを踏まえつつ、母系制の観点から日本の古代史を分析している。
- (10) 林房雄が「文学的回想」(『新潮』昭和29年)でいきいきと証言しているように、大正十三年の第一次日本共産党の解党のち、細々と活動を続けていたヴェーローから唯一の合法雑誌として刊行されていた『マルクス主義』への福本の登場は、その圧倒的なマルクス主義文献の引証と、異様に力強いスタイルにおいて衝撃的であった。「或る日、『マルクス主義』の編集部に分厚な原稿が持ちこまれた。福本和夫という署名がし

てあったが、本人が持って来たのではなく、郵送であったように記憶する。ドイツから帰ったばかりの某高商の教授という自己紹介がついていた。西雅雄が先に読んで、「おかしな文体だが、何かありそうな気がしますね。ずいぶん勉強した人らしい。僕達の読んだことのない原書ばかり引用してありますよ。このまま発表していいものか、どうでしょう?」と言った。／

(中略)／読んでみて、私はびっくりした。百枚近い原稿が二通あったが、そのほとんど全部、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリン、ブハーリン、ルカッチなどの引用文ばかりである。(中略)これでも文章なのだろうか、私はあきれかえった。／だが、博学きわまる論文であることだけは疑えなかった。引用されている文章は私などは一度も読んだこともない重大な章句ばかりだ。堺利彦も山川均も猪俣津南雄も佐野学も佐野文夫も青野季吉も引用してくれたことはない。(中略)完全に圧倒された形で、私は無条件で発表するように西雅雄にすすめた。」(『林房雄評論集』第2巻、18～9頁、昭和48年、浪漫)

- (11) 土田杏村は『マルキシズム批判』(昭和5年7月)において「福本イズム」を「総じて評すれば、福本氏の業績に大いに推奨せらるべき点——我国の経済学研究史上に特記せらるべき一つは確かにあつた。それは氏が「唯物弁証法」なる概念を可なり正しく理解して、マルキシズムの方法論的に正しい理解を我国で全く最初になしたといふことである。マルキシズムの研究に功績の没却せられてならない学者は他にいくらかあつた。併し公平に見てそれらの学者もマルキシズムを唯物弁証法的には理解し得なかつたやうである。福本氏以後俄然として唯物弁証論がマルキシズム考察の牙城となり、遅蒔きながら経済学者もヘゲルの哲学を学んでその所謂弁証法の内容の如何なるものであるかを勉強する時代が来た。一步を先んじた福本氏の得意思ふべしである」(『土田杏村全集』第3巻、261頁)と評している。糸屋寿雄氏は「福本出現以前のわが国のマルクス主義陣営が、哲学(世界観)としての弁証法的唯物論を欠いていたのを、福本が自覚的にとりあげたという積極的な寄与については評価しておかなければならない」と指摘している。(『日本社会主義運動思想史II』120頁、昭和55年、法政大学出版局)三木清が、福本の活動に示唆されてマルクス主義の哲学的な研究へと向かったのも、決して根柢のないことではない。保田の「万葉精神の再吟味」(『京都帝国大学新聞』昭和12年6月)に、「わが愛する日本で、左翼の隆盛になつた日とは、福本イズムの祖述時代である」とある。(『全集』第5巻、378頁)
- (12) 「日本資本主義のマルクス主義的分析に最初にとりくんだのは、山川でも福本でもなく、当時、慶應義塾大学の理財科(後の経済学部)を卒業したばかりの白面の青年、野呂栄太郎であった。」(前掲糸屋寿雄『日本社会主義運動思想史II』166頁)
- (13) この時期保田が中野の影響を強く受けていたことは、前掲拙稿「保田與重郎の習作「芭蕉襍俎」——模倣と引用のアラベスク」参照。
- (14) 谷川徹三「マルクス主義文学理論の批判——政治的価値と芸術的価値との対立を中心として」(『思想』昭和4年4月)は「マルキシズムはブレハーノフやハウゼンシュタインの芸術史的研究を除いてはまだ独自の価値ある芸術論をもつてゐない。ルナチヤルスキーの「実証美学の基礎」の如きは在来の実証美学から一步も出でてゐない。ル・メルテンも結局あらゆる芸術作品がその内容に於いてもその形式に於いても、如何にその時代の社会的歴史的なるものに制約されてゐるかを説いてゐるに過ぎない」(107頁)とマルクス主義文学論の貧困を指摘している。

- (15) 中野の論文には、頻繁にブハーリンが引かれている。とくに「芸術について」ではその頻度が高い。この時期の保田の短歌に「よき友は学校おはれ離りにけりねどこで我はふはりん読みつゝ」(『炫火』昭和5年12月、『全集』第39巻、256頁)「小さい恋愛を相談した池の堤はいつからボくらふはりんを話つたか」(『炫火』昭和6年1月、同、271頁)など、ブハーリンに言及した作品が見えるのは中野論文の熟読を印象づける。
- (16) マルクスの『経済学批判』は、佐野学訳で『マルクス全集』第十冊として、大正十二年五月に大鑑閣より出されたのが最初である。続いて猪俣津南雄訳で大正十五年十月に『マルクス著作集』第一巻として新潮社から刊行された。猪俣訳は、改造社の『マルクス=エンゲルス全集』第七巻(昭和4年4月)にほぼそのままのかたちで収められた。保田の引用は、いずれの訳文とも一致しない。
- (17) 前掲拙稿「保田與重郎の習作期——「上代芸術理念の完成」を中心に」参照。
- (18) こうした革命的浪漫主義は、『コギト』発刊後の保田にも引き継がれている。「十八世紀末及び十九世紀初期の文学の高峰で何かの形でフランスの政治変革に結ばれてゐないといったものはない。」(『想像の力』『帝国大学新聞』昭和9年3月5日、『全集』第2巻、265頁)「十九世紀初期のロマンテイクに於ては、たとへばその傍流としてこの時代に生活した一人の詩人ヘルデルリンに於て見ても、彼の早き詩作のテーマはすべてがフランスの市民の英雄によつてさげばれたスローガンであつた。彼は自由を如何にせよと歌つたのではない。しかし彼は熱烈に自由を歌つてゐる。」(『倫理批評の必要』『現実』創刊号、昭和9年4月、同、286頁)など。
- (19) 前掲拙稿「保田與重郎の「芭蕉裸俎」——模倣と引用のアラベスク」参照。
- (20) 岩本真一氏は、保田の「感情の組織者」という言葉について「文学が携わる領域は感情の領域であると認識している」保田の「浪漫主義」とは、「私=心情=文学」の領域を確保することであり、この領域を踏みにじろうとするものに対しては、「浪漫的反抗」という形で抵抗の姿勢を見せる」(前掲論文、二六～七頁)と述べているが、「感情の組織者」という規定が中野重治に由来することを考えれば首肯しがたい。
- (21) これに関して、この時期が、高校・大学における左翼学生による学園闘争の最盛期であつたことを指摘しておきたい。『プロレタリア科学』は創刊(昭和4年11月)以来、「ニュース」欄に「学生事件一束」という項目を立て、高校大学の動向を報じている。それには以下のような高校の紛争が記載されている。昭和4年12月号=浦和高校(同盟休校)・弘前高校(同盟休校)・松江高校(同盟休校)昭和5年1月号=姫路高校(同盟休校)・宇都宮高等農林学校(同盟休校)・第六高校(争擾)
- 昭和5年2月号=國學院大學予科(学生検挙)・姫路高校(同盟休校)・静岡高校(同盟休校)・高知高校(同盟休校)・第六高校(同盟休校)・第八高校(体操時間のサボタージュ)。「プロレタリア科学」昭和五年九月号には、これらの動向を総括するように、山下徳次の署名で「高校ストライキを中心に」と題する論説が掲載されている。「学校騒動は工場労働者のストライキの頻発に伴つて近年目立つて多くなつて来た。殊に高校のストライキは昨年から今年にかけて激増して、今年になつてからさへ表面に表れただけでも二十六校の中十三校に達してゐる。此の外一般に知られてゐないのだけでも七・八件ある。目覚ましい発展である。併しそれは頻発した数の激増のみではない。その闘争が一般的となり、戦術的となり力には力を以てと言つたやうに戦闘的になつて来たことである。」(60～1頁)大阪高校についての記事は見えないが、昭和5年が全国の高校に同盟休校を中心とする激しい学園闘争の嵐が吹き荒れた年であることがわかる。
- (22) 保田が「芭蕉裸俎」で、中野を「この柔しいアララギ風の歌人だつた尖鋭な理論家」(『保田與重郎全集』第40巻、73頁)と呼んでいるのは、保田が、中野がわずかに第四高校時代に『校友会雑誌』に発表した短歌作品にまで目を通してゐたことを示している。
- (23) 保田が東京帝国大学に入学した昭和6年が学校騒動の終息期であつたことについては以下の指摘がある。「一九二〇年中頃から学校騒動の発生数は次第にふえ、一九二九年秋にはにわか上昇した。一九二九年暮から一九三〇年初めにかけての冬の季節には、三二の高等学校のうち、九校が大きな騒動に見舞われ、その大部分がストにまで発展した。一九三〇年秋までには、『東京朝日新聞』が「学校騒動時代の現出」という大見出しをつけるような時代が到来し、一年のうちに三八校が騒動にまきこまれたほどであつた。それに続く一九三〇年末から一九三一年初頭にかけて、学校騒動は大きなピークに達し、さまざまな学校で同時に発生している騒動に、新聞がまったくふれない日は一日としてなかつた。一九三一年半ばから、九月の満州事変という冷水を浴びたためもあつて騒動の波は引きはじめたが、この後数年間の学校騒動発生数は一九二〇年代半ばにくらべると高い水準にあつた。」(H. スミス『新人会の研究——日本学生運動の源流』191頁、松尾尊兌・森史子訳、東京大学出版会)

〔付記〕引用文中、新字体のある漢字は、固有名を除いて、それに改めた。明かな誤植は訂正した。「好来好来の歌」論のテキストは初出稿によつた。

(平成11年9月6日受理)